

# 第16回 アンパイアスクール報告書

報告者 石黒 裕輔

- 1、期日 平成27年12月5日(土)～6日(日)
- 2、会場 JR東日本硬式野球部柏グラウンド
- 3、講師 **【JABA】** 中本 尚委員長、小山 克仁氏、桑原 和彦氏、戸塚 俊美氏、日野 高氏  
**【NPB】** 友寄 正人審判長、平林 岳技術員、柳田 昌夫氏、小林 和公氏  
牧田 匡平氏、岩下 健吾氏、長川 真也氏、青木 昴氏、小石澤 健氏
- 4、モデルチーム 中央学院大学野球部

## 5、講習内容

### ①GO-STOP-CALL

- ・腕を振り、軽やかに、かっこよく走る。 バタバタにならず、スッと止まって、セットポジションを取る。  
セットポジションは背中を丸めないことと、おしりを落とさない。大きい声でコール。
- ・歩く、長く走る、速く走る、右、左、後ろも混ぜて行いました。

### ②球審の基本動作

- ・投球判定 スロットスタンスを基本とし、ヒール、トゥー、ヒール、トゥーで構える。  
キャッチャーの頭の上に自分の顎がくる高さがベスト。※低くなりがちなので注意。低いと低めのキャッチャーミットが見えない！アウトコース低めがしっかり見える位置をとる。  
キャッチャーがインコースに構えた場合は、バッターとキャッチャーのスロットに入れないので、少し構えを高くし、少し軸足をさげてスクエアにするのも1つの方法である。  
投手の手からトラッキングを始めキャッチャーミットまでしっかり見る。ボールの軌道を確認してからコールする。
- ・ハーフスイング  
振ったと判断したら、バッター側の手で指してスイングストライクを確定する。  
ボールをコールしたがスイングリクエストがあった場合、左手でベースアンパイアに確認する。  
スイング判定の場合はストライクをコールしカウントを表示する。
- ・キャッチャーフライ  
キャッチャーフライが上がったら、キャッチャーが動いた方の足を一步ひいてかわす。  
※しっかりトラッキングが出来ていれば、バットに当たった瞬間飛んだ方向がわかる。

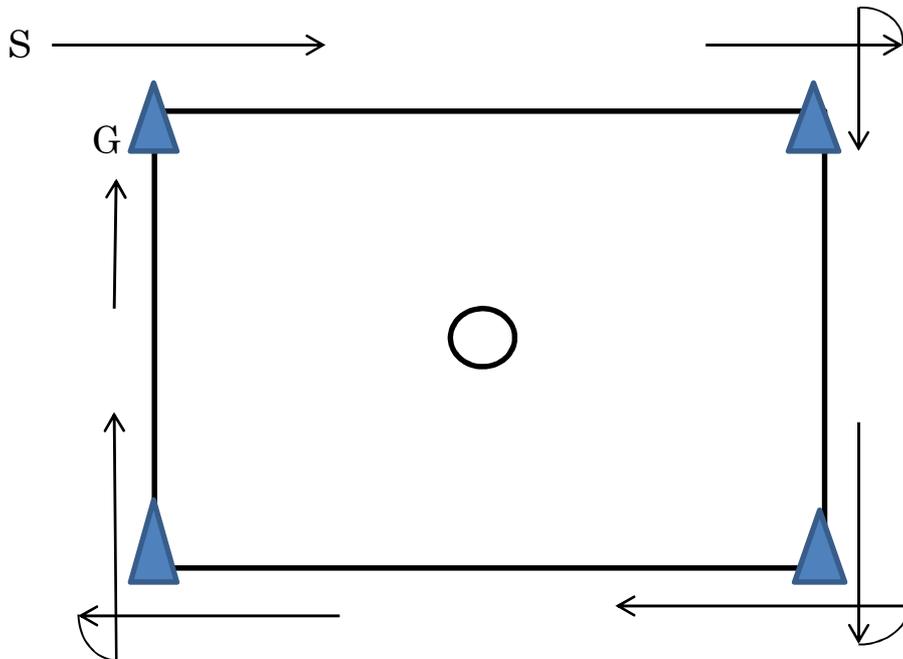
### ③1塁フォースプレイ

- ・最初の位置取りは1塁手の2～3m後方。1塁手の位置に合わせて自分も動く。※1塁手から遠く離れて位置する人が多いが、ホースプレイを見る位置までの距離が長く、判定するまでバタバタしてしまう。
- ・基本は送球に対して90°で1塁ベースから5mの位置へ素早く移動する。
- ・アウトのタイミングなら捕球の確認をするため、コールはセーフよりアウトがワンテンポ遅れる。
- ・セカンドゴロはリードステップ後、野手のプレッシャーを確認してからファウルテリトリに出るか判断。
- ・バント処理は90°まで行くと野手の足離れが見えないので、45°でとどまってオフザベースに対応する。

- ・スワイプタッグにいった場合は、グラブとランナーの間に素早く入る。
- ・ピッチャーへのトスの場合は、ベースから4~5mのライン際のフェア領域で見る。投手の触塁要注意。

#### ④ピボットの仕方とコーンドリル

- ・ピボットの仕方は、右足を軸に左回りで回り左足を行く方向へ踏み出して行う。
- ※1塁アンパイアが内野内に入り、1塁触塁とオブストラクションを確認し、2塁へ向かう時にピボットを行う。
- ・コーンドリルでの練習



Sからスタートし、中心のボールを見ながら走る。角のコーンをピボットでターンし、Gでストップしてコールする。※繰り返し行う。

#### ⑤2 人制メカニクス

- ・走者なし (ライトフライ)

##### ※ベースアンパイア

ベースアンパイアがゴアアウトする打球は、

1、ライン際 2、野手が速く走りながら追う 3、野手が集まる この場合はゴアアウトする。

長打になったら野手が送球するのを確認して、本塁のカバーへファウルテリトリを通過して行く。

イージーなフライは球審にまかせ、中に入る。

ベースアンパイアが中に入り、ピボットターンで2塁に向かう手順

- 1、リードステップでゴアアウトか中へ入るか判断
- 2、ピボットする位置まで打球を見ながら行く
- 3、ピボットしながら打者走者の1塁触塁を確認
- 4、2塁へ最短距離で行く (走者が2塁に行かなければとどまる)

##### ※球審

球審はベースアンパイアの動きを見て打球判定か、走者のプレイかを判断する。

走者を受け持ったら内野内をショートカットして2塁、3塁のカバーへ行く。

・ 走者1塁 (外野飛球)

※ベースアンパイア

ライン際以外はすべて打球判定する。走者は2塁まで受け持つ。(球審がライト線の打球判定をした時のみ3塁まで受け持つ)

※球審

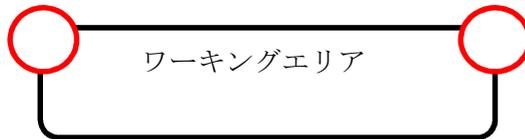
ライン際レフト線ライト線の打球判定を行う。レフト線の打球判定後は3塁カバーへ行く。ライト線の打球判定後は本塁のプレイに備える。

ベースアンパイアが打球判定する時は、球審は3塁カバーへファウルテリトリを通過して行く。コーチボックスの手前で止まって状況を確認。中に入って3塁でのプレイに備えるか、戻って本塁のプレイに備えるか判断する。

**メカニクスを行う時、必ず大きな声で自分の動きを伝え、相手も大きな声でOKをだす事が重要**

⑥ワーキングエリア

- ・ 2人制の場合、走者がいる時ベースアンパイアはダイヤモンド内に入る。
- ・ 走者1塁と1・3塁のケースはセカンド野手側、その他のケースはショート野手側に位置する。
- ・ 基本的に図に表すワーキングエリア内において、1・2・3塁のプレイに対応する。



投手板

<盗塁>

- ①キャッチャーが投球を捕球したら体を起こす。
- ②キャッチャーが2塁に送球したら右足を2塁に向けて一歩出す。
- ③送球がピッチャーを通過するあたりで素早く左、右と一歩ずつ2塁へ向かいセット。(計3ステップ)

<ダブルプレイ>セカンド野手側に位置し、ショートゴロの6→4→3の場合

- ①打球方向に一歩出す。(右足)
- ②ショート野手に正対。(左足を一歩出す)
- ③ショート野手が捕球しセカンドに送球する時には、セカンドベースに正対。
- ④2塁のプレイを確認後、右足を一歩1塁方向に出しながらアウト or セーフを出す。
- ⑤左足を一歩1塁方向に出してセット→コール。手はひざにロックしない!(ロックしている暇は無い!)

※2塁でオフザベースが起こったら、1塁のコール後に行く。

※ショート野手側にいた時は、セカンドに送球が来る前に3ステップでセカンドベース前まで移動しておく。

## <牽制球>

- ・1塁へは左にターン右足を一步踏み出しセット。3塁へは右にターン左足を一步踏み出してセット。
- ※プレイが起こるまで一瞬なのでターンするだけで精一杯、近づこうとする暇は無い！

## ⑦ブルペンでの投球判定練習

- ・投球練習のワンモアピッチからホームベースを掃いてマスクを装着しキャッチャーの後ろに着くまでの流れ。だら〜っと一連の流れをやる人が多いが、大きい声でワンモアピッチ後、ホームプレートが大きく掃いて、一步でピッチャー方向を向くようにターンし、ピッチャーを見ながらその場でマスクを装着、ピッチャーを見ながらキャッチャーの後ろにはいる。
- ・構えの高さをほとんどの人が注意されました。キャッチャーの頭の上に自分の顎が基本ですが、ほとんどの人の構えが低かったです。低めのキャッチャーミットが見えづらくなるので要注意です。
- ・トラッキングがしっかり出来ているか、コールのタイミング、声の大きさ、リラックス等、チェックして頂きながら行いました。

## ⑧キャンプゲーム

- ・2人1組になり球審か塁審を決め、1組づつランダムに出題される連続6ケースに対応する。
- ・私は球審を担当、実際に行った6ケース中3つを紹介します。

1、1死1塁、1B-1Sで投手がセットを停止せず投球し打者が打ち内野ゴロ、2塁でアウト。

→①投手がセットを停止しなかった時にボークと発声。

②打者が打ち2塁でアウトが確定した時にタイム。

③投手にボークを宣言。

④1塁ランナー2塁へ進める。

⑤バッター打ち直し。

⑥カウント1B-1Sを記録員に伝える。

2、2死2塁で外野へヒット、2塁ランナーホームイン後バッターランナー2塁でアウト。

→①ホームベースを指しザッツ・ラン・スコア。

②記録員に向かいザッツ・ラン・スコア 1点を示す。

3、2死2塁でライト前ヒットを本塁へ送球、2塁ランナーが3塁を回ったところでベースコーチがランナーに接触して止める。

→①接触があった時にタイム。

②ベースコーチにインターフェアランスを宣告。

③2塁ランナーにコーチの肉体的援助でアウト。

このケースはプレイが行われている走者への肉体的援助ですので、接触したときにプレイを止めます。

実際この時、私の対応は間違えました。ランナーとコーチが接触した時、ポイントいれただけで、プレイが落ち着くのを待ってタイムをかけました。ランナーにばかり気を取られ、外野手が本塁へ送球する大事どころを見落としたため対応を間違えました。良い失敗をしたと思います、今後にかかっています。

## ⑨座学 夕食後ホテルにて

- 1、高橋 勝利氏 (U-18 ワールドカップに参加して)
- 2、柳田 昌夫氏 (WBSC プレミア 12に参加して)
- 3、平林 岳氏 (2人制のポイントについて)

## 6、第16回アンパイアスクールを受講しての感想

各講習プログラムにおいてプロ審判の講師の方がデモンストレーションを見せてくれました。

GO-STOP-CALLでは軽やかな走りから静かに止まりセットポジション。そして声の張りときれのあるジャッジに感激しました。試合の中ではほとんどの判定にGO-STOP-CALLが用いられている事からも、この基本の動きを繰り返し練習し、プロの方のGO-STOP-CALLに少しでも近づければ、試合でも安定した判定ができると思えました。私は講習会でしかGO-STOP-CALLを行っていませんでしたが、今後グラウンドに出る際は練習が必要だと感じました。

今回2人制の審判の動きを学びました。2人制は4人制より多くの“目”が必要になります。

常にボールに正対しながら、走者の動き、触塁、相方審判の動き、そしてプレイを読む事をしなければなりません。これだけの事をワンプレイの中で行うので、相方とは声のコンタクトがなければ2人制は成り立ちません。初めて2人制を体験し2日間でマスターする事はむずかしいですが、基本的なメカニクスは学んできました。機会があれば積極的に2人制を実践したいと思います。

2人制を習得する事こそが審判を知る事なのだと思います。審判が行うべき事は2人制に集約されているのだと思います。2人制からスタートし3人、4人制にステップアップするのが本当は一番良い、とプロの方がおっしゃっていました。2人制が習得できているから4人制をやった時、多くの“目”を身に着けているので誰かのミスをカバーできたり、あらゆるプレイに対応できるのだと感じました。

このアンパイアスクールは継続して参加してこそ意味があるのだと言われる事がわかったような気がします。今後はアンパイアスクールで学んだ事をいかし、自信をもった判定で試合を見ている皆を納得させられる審判員を目指したいと思います。

有意義な講習会に参加させて頂きましたのも新潟県高等学校野球連盟のご協力があったのもので厚く感謝申し上げます。

新潟県高等学校野球連盟審判部

北支部審判員

斎藤 太、近田 俊幸、佐藤 八十穂、渡辺 壮  
佐藤 誠、能村 友紀、佐藤 弘二、柄澤 誠、  
新妻 好弘、堀 俊一、石黒 裕輔